



# 鎌田 實 (題字も)

# 治療する

10 最終回

日本の医療のなかに納得や信頼や安心があふれるといいなと思つて、この短期集中連載をはじめた。

滋賀県に住む40歳の女性の方からメールをいただいた。4年前に胃がんと手術をした。最近、肝臓に転移をしてしまった。末期と診断された。もう治る見込みはないと切りすてられた。

「私はもう治療はしてもらえない状況なのだろうか。抗がん剤の少量投与はどうか」というメールだった。単身赴任の夫と小さな二人の子ともがいる。ほくはメールで返事をした。

「乳がんや大腸がんなら、転移しても、まだ治療していくチャンスはあるのですが、胃がんとなるとたいへん厳しいです。抗がん剤の少量投与方法もあるが、はっきり効果が期待できるわけではありません。状況は厳

しいが、人間の体にはよくわからないことが起きることがあります。明るくしていると、不思議なことが起きることがあります。負けないでください。再び彼女からメールが届いた。

「病院は入院治療を受け入れてくれませんか。1カ月の余命といわれても、どうしていいかわかりません。もう一度抗がん剤治療をやりたいのです。ケアマネジャーさんが在宅訪問診療や訪問看護を紹介してくれるようになりませんか。ちょっと救われています」

ほくは答えた。「主治医の先生の考えが正しいと思う。その抗がん剤に対する耐性ができているので、危険を冒してまですでに使用した抗がん剤を使うのは難しいのではないでしょうか」

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

つらいので外来を再度受診した。そこでも入院の適用外だといわれた。逆に「腹水が出るのは、あなたの栄養管理が悪いから」としか

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

## 院内のポストに寄せられた言葉

再びメールが来た。

「他の医師が相談にのってくれました。2週間入院できることになりました。話すこともかなり疲れるようになってきました。目を閉じてしか話せない。もう少し入院を続けたい。でも、先生方は一度帰宅したほうが良いとすすめます。最期を迎えたときには、ケアマネジャーさんに鎌田先生に伝えてもらおう約束をしました。もう少しの間、私のつばやきにお付き合いいただけたらうれしいです。長野は雪が降って、寒くなってきましたのでしようね。鎌

「よくがんばっていますね。腹水が増強した。症状が

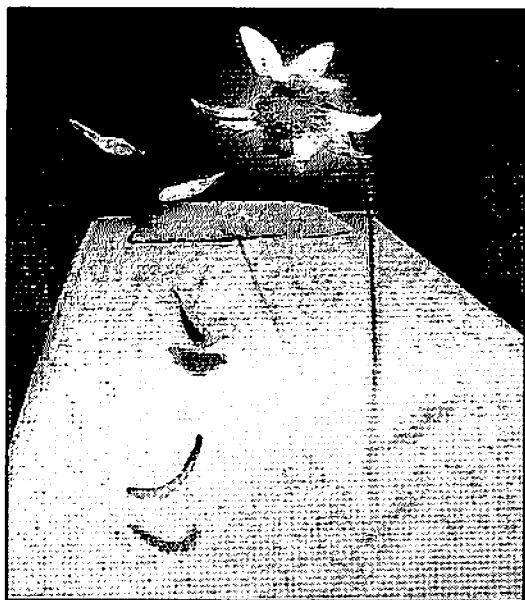
## 言葉

田先生もどうぞご自愛ください。ありがとう」

「あなたは声をしっかりと聞いています。思いのままにつぶやいてください。遠慮せずにつぶやいてください。雪が家のまわりで降り続いていきます。八ヶ岳は真っ白です。少しよくなることを祈っています。鎌田賢」

数日後、ケアマネジャーからメールが入った。

「先日、いただきました録音田先生のお言葉はすっかり彼女にお伝えできました。本日、16時49分にとても静かに最期を迎えられました。お子さまたちをはじめ、ご家族さま、親戚の方が、たくさんさんの友人に囲まれて、先生の存在は、つねに彼女



コラージュ・羽生春久

の励ましとなり、また、間を介してケアマネとしてかわらせていただいた私の励ましにもなっていました。ありがとうございました」

「長い間ご苦労さまでした。あなたの存在に、彼女はどれほど救われたか。あなたの存在はとても大きかった。彼女と同じように、ほくもいつも感謝していました。長い間、ご苦労さま。ありがとう」

結局、40歳のがんの末期

の患者の命を、どうしてあげることもできなかった。でも、彼女のつぶやきを聞いてあげる人が必要だった。ケアマネジャーが彼女のつぶやきを拾って、パソコンに打ち込んでくれた。何もしてあげることはできないと思わずに、だれでもいい、身近な人が小さなつぶやきにちよつと耳を傾けてあげてほしい。

兵庫県立柏原病院の小児科が奇跡の復活をとうげた。

丹波地域の三つの病院の小児科医が、次々に辞めてい

った。一つの病院は小児科医がいなくなった。和久祥三医師の病院も小児科医が3人から1人になりかけた。夜間救急外来の子どもの受診が多かった。燃えつきかけた和久医師も辞職の決意をした。その時、噂を聞きつけた、お母さんたちが立ち上がった。

お母さんたちは、三つのスローガンを掲げた。

「コンビニ受診を控えよう」「かかりつけ医を持つとう」「お医者さんに感謝の気持ちを伝えよう」

「ありがとうポスト」が病院内に置かれた。

「先生、大丈夫かなあ」

「先生、ありがとう」

言葉が寄せられるようになった。

「診てもらってあたりまえと思っていた自分が恥ずかしくなりました。子どもの命を守ってくれて、ありがとう」。和久医師は何度も泣いたという。辞職を思いとどまった。

そして、閉鎖寸前だった病院の小児科に、次々と医

師が集まりました。いまでは、小児科医は5人に増えた。燃え尽きた一人の小児科医を支えたのはお母さんたちだった。地域の小児科崩壊を救ったのは、お母さんと子どもたちの「ありがとう」だった。

医学の進歩はめざましい。なのに、国民の医療に対する不信や不満や不安はかえって募っているように感じられた。ピンチを脱出するための魔法の言葉を見つけた。「ありがとう」。医療者側も患者側も、もつともつと「ありがとう」を言いあつたらどうだろう。

メールや手紙がどんどん来ている。こんなに聞いてもらいたい人がいるのかと驚いている。

読者と鎌田との対話はまだ終わっていません。中休みを入れて、いただいた手紙を整理して再開します。手紙やメール、まだ間にあいます。また、お会いしましょう。

たくさんさんのメールや手紙、「ありがとう、ありがとう」。